

列王記第二 17章 8 – 9節 「他の神々」

1 A 異邦人の風習

1 B 当然の行い

2 B 生ける神への回心

2 A 偶像への回帰

1 B 空しさの埋め合わせ

2 B 生ける神の代用

1 C 神の有限化

2 C 罪の隠蔽

3 C 奴隷状態

3 A 再決心

1 B 罪の告白

2 B 罪の遺棄

3 B 十字架

4 B 主なるキリスト

本文

列王記第二 17章 7-8節を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、16章まで来ました。そして午後は17章と18章を学んでみたいと思います。今朝は17章 7-8節に注目したいと思います。

7 こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から連れ上り、エジプトの王パロの支配下から解放した彼らの神、【主】に対して罪を犯し、ほかの神々を恐れ、8 【主】がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の風習、イスラエルの王たちが取り入れた風習に従って歩んだからである。

イスラエルの国がアッシリヤに攻められました。イスラエルの王ペカの時代に、アッシリヤは北イスラエルの北半分を攻め取り、人々を捕え移していきました。そしてホセアという人物が彼を暗殺して、ホセアが王となりました。彼はアッシリヤに服従していましたが、密かにエジプトと協定を結んでいたため、アッシリヤは首都サマリヤを包囲し、ついにイスラエルは滅びました。紀元前 722 年のことです。そしてソロモンから始まり、ヤロブアムによって北イスラエルが始まって以来続いてきたこの王国は終止符が打たれました。17 章は、列王記第一と第二の総まとめのような章になっています。なぜそうってしまったのか？その理由を、後で言い逃れができないほどに、はっきりと、じっくりと書いています。

その説明の始まりが今読んだところですよ。それは、イスラエルが主なる神、ヤハウェを出エジプトを通して知ったのに、他の神々を敬い、かつてイスラエルが追い散らした異邦人たちの風習に従って歩んだからです。今朝は、イスラエルの民がなぜ、そのように異邦の民の神々を恐れるようになったのか、その習わしの中に入り込んでしまったのか、そしてなぜ神はそのことを忌み嫌われたのかを考えてみたいと思います。

1 A 異邦人の風習

1 B 当然の行い

カナン人ではありませんが、約八百年後、ギリシヤ人やローマ人も習わしがありました。エルサレムで始まった教会が、外に出て行って異邦人にも福音を伝えていき、主がユダヤ教徒であったパウロを捕えて、彼を回心せしめ、異邦人への福音宣教者にしました。それで彼は、異邦人の多くいる教会宛てに手紙を書いています。その中にその信者たちが住んでいる社会や文化のことを書いていて、クリスチャンたちがどのようにして、その中から出てきて、生ける神と主イエス・キリストを信じるようになったのかを描いています。

ローマ人への手紙 1 章を開いてください。18 節から 23 節まで読みます。「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」すなわち、偶像崇拜を行っていました。天地を造られた創造主をあがめるのではなく、自分たちの造る神々を拝んでいました。その結果として、思いがむなしくなるとあります。

そこで、彼らは次のようなことを行っていたとパウロは論じています。「こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。(26-27 節)」同性愛行為です。ギリシヤやローマ社会では当たり前とされていました。そして、今の社会でも許容されつつあります。日本では歴史的に、武将や僧侶などが、その他、男の子を男娼として抱えていた社会であり、明治維新の前まで続いていました。けれども、このようなことを行なえば当然ながら性病にかかります。同性愛でなくとも、結婚外の性行為によって性病にかかる可能性がどっと上がります。文化的に別にかまわないではないか、という理解がありますね。そして小説、漫画、映画、その他あらゆる媒体は、これらのことが当たり前である、楽しみであるという理解があります。

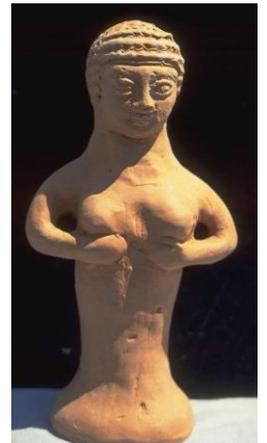
今のアメリカが、ハリウッドを始めとする結婚外関係を美しく描く考えを世界に輸出していますが、これはキリスト教とは相容れない、実に異教的な考えなのです。キリスト教国と言われていたかの国も、かつてのイスラエルの

ように異教の習わしを全面的に受け入れてしまっています。けれども、大事な点は、天地創造の神をあがめて、それでこのような淫らな行為をすることはできない、ということです。

そして、その他、当たり前を受け入れられている習わしをパウロは列挙しています。「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしめる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。(29-31 節)」同性愛行為以外の、その他の悪と不義を取り上げています。これらのことは悪いとはわかっているけれども、世間がこれを受け入れている側面がありますね。

パウロは、ここまで詳しく書きませんでした。コリント人への手紙、ガラテヤ人への手紙、エペソ人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への手紙など、異邦人の信者の多くいる教会には、同じ社会的背景について教えています。

これらは天地を創造した神をあがめておらず、自分たちの造った神々を拜んでいたために、起こったことです。けれども、なぜ偶像崇拜とこうした行いが密接につながっているのでしょうか？自分が像を刻む時に、自分に不都合なものは刻まないからです。自分の益になるもの、自分の欲を満たしてくれるものを造りますが、自分に損になるもの、自分の欲を捨てることを教える神をわざわざ造ろうとは思いません。



そこで、神々と呼ばれているものは、自分の欲望をそのまま表象しているもの、目で見える形で表現しているものになっています。古代のカナン人の世界に戻りましょう。先ほど性的不道徳を取り上げましたが、カナン人はアシュタロテまたアシェラという女神をあがめていました。これは豊穡をもたらす神ですが、その像を見ればすぐに分かります。それは当時のポルノです。乳房の部分が強調されています。これは、男の性的欲情を駆り立てるためだけに造ったものです。いかがでしょうか、今はこのような像はないかもしれませんが、女性が、自分の性的な部分をひときわ目立たせる姿勢をするのであれば、それはそのままアシェラの偶像を持ってきているのと同じであります。

そして快樂を楽しんだら、先ほど性病の話をしました。もう一つ、望まない妊娠をします。アモン人がモレクという神を拜んでいて、イスラエルも拜み始めました。モレクは「王」というもとの意味がありますが、「母親と涙と子供たちの地に塗られた魔王」とも呼ばれていました。人身供養が行われていたのです。あまりにも残酷ですが、ウィキペディアにあった情報をお読みします。「彼らはブロンズで「玉座に座ったモレクの像」を造り出し、それを生贄の祭壇として使っており、像の内部には7つの生贄を入れる為の棚も設けられていた。そしてその棚には、供物として捧げられる小麦粉、雉鳩、牝羊、牝山羊、子牛、牡牛、そして人間の新生児が入れられ、生きたままの状態に焼き殺しており、新生児はいずれも、王権を継ぐ者の第一子であったとされる。また、生贄の儀式には、シ

ンバルやトランペット、太鼓による凄まじい音が鳴り響き、これは子供の泣き声をかき消す為のものとされている。」なんて、こんな恐ろしいことを！と思われるかもしれませんが。けれども、私たちは毎日、現在進行形でこの恐ろしいことを行なっています。墮胎された胎児の姿を写真でご覧になったことがあるでしょうか？簡単に言えば、バラバラ殺人事件を行なっているのと同じです。細胞組織などではなく、はっきりと子であり、人間であると分かっているのに、それを切り刻んで取り出しています。

ポルノにしても、墮胎にしても、不道徳を行っている者たちは、その対象を物か何かにしか考えていません。男はそのような画像や映像を見るときに、そこに見える女性には人格はありません。「物」であり「人」ではないのです。胎児も同じです。生命のある、魂のある一個の人間を、まるで腫瘍であるかのようにみなしているのです。

2 B 生ける神への回心

しかし、このようなことは当たり前だと思って慣習のようなものだと考えていた者たちが、天と地を造られた神がおられ、この方が自然を造られ、そしてご自分のかたちに人を造られたことを知ります。そして、エルサレムで十字架につけられたイエスが、三日目によみがえられたことを知りました。この復活によって、天地万物の神は彼がご自分の独り子であり、私たちが罪の滅びの中から救う方であることを知りました。それで、空しい偶像から神に立ち返ったのです。パウロが、テサロニケ人にこう言いました。「あなたがたのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり・・・（1テサロニケ 1:9）」

そして、コリントにいる信者たちにはこう言っています。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。（1コリント 6:9-11）」彼らの中には、これらの行いをしている者たちがいました。けれども、今は、主イエス・キリストの名と神の霊によって、洗われて、聖なる者とされ、義と認められたのです！なんという幸いなこと、良き知らせでしょうか！私たちは、このように変わることができます。

2 A 偶像への回帰

イスラエルの民も、同じように忌まわしいことを行ない、あらゆる偶像を拝んでいたエジプトから解放されて、生ける神を知るようになりました。そして、約束の地に入るときは、これらの忌まわしいことを裁くために、イスラエルの民に対して彼らを聖絶し、また追放しなさいと命じられました。ところが、まったく同じことを彼らは再び行ってしまったのです。それで、かつて神がカナン人をこの地から追い散らされたように、今はイスラエル人をこの地から引き抜かれ、外国の地で捕囚の民とせしめたのです。

1 B 空しさの埋め合わせ

なぜ彼らは、そして私たちは、戻ってってしまうのでしょうか？かつての悪い行いを繰り返してしまうのでしょうか？私たち人間には、空しさがあります。心に虚無があります。それは、そのようにさせた生ける神ご自身のよってのみ、埋めることのできるものです。この方がそうさせたのですから、この方によってのみ満たされます。ところが、この方は人の肉眼には見えない方です。霊であられるからです。そして人は、目に見えない存在を不安に思います。見えないものよりも、目に見えるもので空しさを埋めたいと思うのです。そのために、偶像によって代用します。

私たちが、生ける神との交わりが希薄になる時に偶像を拝むという誘惑が強くなります。イエス様を信じて、新しく御霊によって生まれて、救いの喜びに満ちている時は感じなかったものが、この方との日頃からの関わりが希薄になっていき、それでその新鮮な思いは昔のものとなってしまいます。神がここにおられるという意識が薄れてしまうのです。そこでこうした空しい思いを満たすべく、かつて行っていた習慣を再び始めることで埋めようとするのです。これは一度洗われたのに、汚れの中に戻っていくことであり、とても悲惨な思いになります。「主であり救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそれに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終わりの状態は、初めの状態よりもっと悪いものとなります。（2ペテロ 1:20）」

2 B 生ける神の代用

1 C 神の有限化

けれども、「どうしても目に見える物に頼りたい。目に見えない神から慰めを受けることはできない。」と感じるかも知れません。けれども、私たちは一度、目に見える物、偶像に頼ると、生ける神が見えなくなってしまいます。交わりが絶たれてしまいます。そのため、神は、ご自分の他に神々があってはならないと厳に戒めておられます。

私たちが生ける神をあがめて得られる至上の喜びは、まず、この方が無限であるということです。私たちが欲しても、欲しても埋められない空虚さや疲れが、完全に埋められるだけでなく、溢れて流れ出るようにしていただきます。この方が無限の方だからです。「あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。（イザヤ 40:28-29）」

そして神は、今読んだように、地の果てまで創造された方です。ですから、神のおられないところは一切存在しません。どこに行っても神はそこにおられます。これを神学用語で偏在する、と言います。遍く存在する、ということです。もし偶像を拝むのであれば、一定の処にしか存在しないので、自分はいつまでもそれに振り回されます。けれども、生ける神をあがめている人は、どんなことでも、どんな状況でも主がそこにおられることを確信しているので、心が安定して、主を待ち望むことができます。

2 C 罪の隠蔽

そして偶像を拝むと、あるいは、天地創造の神をあがめるのをやめると、自分の罪は隠せると思ってしまいます。自分が罪を犯しているそこに、神はいないと考えることができるからです。「ああ。主に自分のはかりごとを深く隠す

者たち。彼らはやみの中で事を行ない、そして言う。「だれが、私たちを見ていよう。だれが、私たちを知っていよう」と。(イザヤ 29:15) 」そして、神の裁きを免れると思っています。自分を公正に裁く知識を持っていないと思うからです。「私たちは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。たとい、にわか水があふれ、越えて来ても、それは私たちには届かない。私たちは、まやかしを避け所とし、偽りに身を隠してきたのだから。」(イザヤ 28:15) 」

3 C 奴隷状態

そして自分を奴隷状態にしてしまいます。自分は神に縛られていたけれども、自分の心の思うままを行なって自由にされたと初めは思うかもしれませんが、ところが、それを行なわないと自分がやっていけない、すなわちその欲望の奴隷になってしまっています。支配しているつもりが、支配されているのです。そのことのために、どれだけのお金、どれだけの時間、どれだけのエネルギーを費やしていることでしょうか。そこから出てくる良い実はないのに、ひたすらそれを行ない、自分を滅ぼしてしまうのです。

それが、イスラエルがアッシリヤに捕え移された結果でした。彼らが主に背き、他の神々を拝んだので、自らが奴隷として生活しなければならなかったのです。

3 A 再決心

けれども、主はイスラエルを見捨てておられませんでした。イスラエルを裁かれましたが、いつまでも怒っているではありません。彼らを見捨てず、その苦しみに対する十分な慰めを与えてくださいます。神は二度目のチャンス、三度目のチャンスを与えられる方です。

1 B 罪の告白

初めにしなければいけないことは、罪を罪として認めることです。罪を言い表すことです。言わないことによる、魂の苦しみは悲痛なものがあります。ダビデがそれを、神の御手が重くのしかかり、自分の骨髄が夏のひでりで乾ききったようだと話しています(詩篇 32:4)。罪を告白することはとても勇気の要ることですが、その後にあるものは神の赦しと憐れみ、そして罪の清めです。「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ 1:9) 」

2 B 罪の遺棄

次に私たちがしなければいけないことは、罪を捨てることです。その罪を悲しみ、その罪を憎み、それを自分から捨てる強い意志が必要です。「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。(箴言 28:13) 」この罪によって、自分が失ってしまった霊的な喜びを取り戻したいという強い願いと祈りが必要です。ダビデはバテ・シェバとの姦淫の罪の後にこう告白しました。「神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。私は、そむく者

たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。（詩篇 51:10-13）」

3 B 十字架

そして自分のこの罪が、キリストを十字架につけた、この罪のゆえにキリストが十字架につけられ、その苦しみと神の怒りを受けられたことを知りましょう。この血潮に神がご自分の心を刀で刻み込むような痛みと、同時に父の愛が流れ出ているのです。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ 2:20）」

4 B 主なるキリスト

そしてこの方を主とあがめてください。これからも自分の思いが出てくるでしょう。自分の欲が自分をかき乱すでしょう。けれども、この方が私の罪のための命さえ惜しまずに愛してくださった方であるから、この方を第一とすると決めてください。「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。（1ペテロ 2:24）」

今、読みましたように、主は、私たちを罪から離れさせてくださいます。義のために生きるようにしてください。そして、自分が受けた傷を、ご自身の受けられた傷によって十分に癒すことのできる力を持っています。偶像という空しいものから受けた痛みは、キリストと一つにさせられた自分がいることによって、必ず癒しと恵みの流れとなってあふれ出てきます。